

先週の講壇から

“ 臨終の床 ”

創世記 第 48 章 1 節～11 節

聖句「お前の顔さえ見ることができようとは思わなかったのに、なんと、神はお前の子供たちをも見させてくださった。」(48:11)

1. 《臨終それぞれ》 山田風太郎の『人間臨終図鑑』は9百人余の最期の姿を紹介するカタログです。その中から、キリスト教信仰と深い関わりのある、2人の作家の最期を紹介しましょう。独歩は肺結核で療養所に入りますが、妻と妾に看護させ「火宅」そのものでした。臨終の床で、植村正久牧師に「あなたの鍵で、私の心を開いてください」と懇願します。植村に「ただ祈りなさい」と勧められますが、独歩は「私には祈ることが出来ません」と嘆くのでした。
2. 《赤ん坊の祈り》 独歩と同じく若き日に植村正久から受洗した正宗白鳥は、一旦は棄教しながらも、何十年もかけて回心の道を辿ります。自らの死を予感した白鳥は植村環牧師(正久の娘)に葬儀の依頼をするのです。環牧師は連日、白鳥の病床に通い、聖書を読み讃美歌を歌って励まします。それに応えて、白鳥は幼子のように「アーメン」と唱えます。単純になって、祈らなければ、天国に入ることは出来ません。「祈り」は理屈ではありません。赤ん坊が母乳を求めて泣くように、祈らなければならない時には、人は誰でも祈るのです。「祈ることが出来ぬ」というのは屁理屈です。未だ銜いがあるのです。理屈を言っている前に、1回でも多く祈らないと、必要な時に口を突いて「アーメン」の一言が出て来ません。
3. 《臨終のヤコブ》 「創世記」48章には、族長ヤコブ(イスラエル)の臨終の祈りがあります。最愛の妻ラケルに先立たれ、その遺児ヨセフを溺愛していましたが、ヨセフはエジプトに奴隷として売り飛ばされ、再会の願いも叶わぬと諦めていたのです。ところが、神の不思議な御計画によって、再び巡り会うことが出来、ヨセフの2人の息子(自分の孫)の顔も見ると幸いを得たのです。もう自分は死んで逝くのです。でも嬉しいのです。自分が世を去らねばならぬ悲しみよりも、大きな喜びがあるのです。だから、孫たちを祝福するのです。喜びのために祈っているのであって、自分の悲しみのためには祈らないのです。臨終の床に就いた時、私たちはどのように祈るでしょうか。幾ら他人に祈って貰っても、幾ら口先で祈っても、自身の心に祈りが伴わなければ、希望も平安も生まれないのです。

朝日研一朗牧師